

死に切った「救い主」

(ヨハネ一九・三二〜四二)

何時の頃からだろうか。「勝ち切る」なる奇妙なことばがよく聞かれるようになったのは、恐らくはスポーツ、特にサッカーの解説やコメントなどで用いられ、次第に慣用になっていったと思われる。確かにサッカーは「下駄をはくまで解らない」スポーツ。例えリードを保っていても土壇場で追いつかれたり、ひっくり返されたりで辛酸をなめたケースは最後のワンプレーでW杯出場を逃した「ドーハの悲劇（九三年）」や残り六分で三得点をあげられて逆転負けを喫した「カイザークラウステルンの悲劇（〇六年）」など枚挙に暇がない。

閑話休題。今朝の箇所は刑場の露と消えたイエスの死と葬りの記事であるが、ヨハネ福音書の記述は他の福音書に比べると実に詳細だ。以下三つのポイントでイエスがいかにかに「死に切った」お方であるかを考えたい。

一、死に切ったイエス

イエスの処刑は過越の祭りの直前

であった。ユダヤの律法によれば死刑にされたものの死体を翌日まで木の上にかけておくことは出来なかった（申二一・二三）、彼らは処刑された三人を十字架から降ろさねばならなかった。恐らくは絶命していなかったであろう二人の強盗については「情けの一撃」を加え、足を折って絶命させたが、イエスにはそれをしなかった。彼はすでに死んでいたからである。福音書記者はこの事実

に過越の祭りの際にささげられるいけにえを重ねた。というのも民数記九章一二節にあるように過越の時に捧げられる小羊の骨は折られてはならず、十字架上で死に切ったイエスもまたそうだったのである。

二、殺され切ったイエス

その時である。一人の兵士が近づき、イエスの脇腹を刺した。興味深いのは福音書記者はこの文頭に「しかし」という逆接を置いていっていることである。完全な犠牲として自らをささげられ、イエスは死に切った。だから人間の側でそれ以上のことをする必要はなかったはずである。にも拘らずこの無名の兵士は槍をもってイエスの体を突いた。ある意味「蛇足」としか思えない出来事である。しかし「事実は小説より奇なり」であり、その際イエスの体から流れ

出た血と水に福音書記者は意味を見出した。医学的にはこの水は肺機能の低下によつて貯留した胸水だと考えられるようだが、これを記した意図はそれ以上にこの血と水が持つ神学的な含みにある。福音書記者はこの血に罪の赦しに必要な犠牲を、また水にはイエスが生前預言的に語っていた水、即ち霊による新しい命を見た。死人に鞭打つがごときの兵士の無慈悲と残忍さの中に、神のいのちは現れている。暗闇に輝く光（一・五）の如くに。

三、葬り去られたイエス

完全なままに完全に死んだイエスは、兵士による無慈悲な死体損壊を経て墓に葬られることになったのだが、この福音書ではその引き取りに二人の人がかわったことが記される。一人は隠れイエスの弟子、アリマタヤのヨセフであり、もう一人はあの深夜の訪問者ニコデモであった（ヨハネ三・一）。彼らはユダヤ人の埋葬の習慣に従つてイエスを亜麻布で巻いてミイラにした。多くの注解者はこの二人の信仰の深まりに注目する。確かに「隠れキリシタン」ヨセフも、「深夜の訪問者」ニコデモも、自らのイエスへの思いを表明している。しかしここにはもう一つ大事な意味がある。それは彼らがイエスの死の確かな証人とな

ったということである。しかも二人、複数の証人だ。彼らは二人でイエスの体をミイラにし香料を塗った。その作業中、確かにイエスが死に切ったことを確認していたとさえ言える。彼らは師であるイエスの死をその軀の冷たさと硬直によつて確認し続けたのだ。

* * *

最近ポータルサイト「エキサイト」の世界びつくりニュースにパキスタンの医師がイエスの復活を医学的に検証し、イエスは気絶していただけだという説を唱えたという記事が出ていた。しかし事情通（！）の間では別段吃驚するようなことではない。イエスを預言者の一人に数えるイスラム教では、イエスはユダヤ人たちには十字架にかかつて死んだように見えたが実際はそうではなかったと教え、その一つの解釈として気絶説は昔から存在していた。今回のニュースはそのバリエーションに過ぎない。気絶説は成程一つの説明にはなるだろう。しかしそれは福音書の語るメッセージではない。福音書の描くイエスはどこまでもよみがえりの主であり、死はその前提として不可欠の要件だ。イエスは死に切った救い主である。私たちの罪を赦し、いのちを与えるために。アーメン。